高等学校の実践報告 I

1. いじめ事案に対する組織の実態・課題による目標設定

いじめ事案に対する 組織の実態	目標 (目指す組織像)	いじめ事案に対する 日常的な課題
<ul style="list-style-type: none"> 生徒から持ち込まれる情報や相談、ネットパトロールから学校へ入る連絡に応じて、担任、生徒指導部、相談部が中心に対応している。 年に1回、2学期の人権週間に合わせ、生徒及び教員に向けて人権講話を実施している。 	<ul style="list-style-type: none"> いじめに対する生徒の認識を基に、全ての教職員が共通理解を図り、共通認識をもって適切に対応できる力を養う。 被害者と加害者、それぞれの立場における認識や心の動きに注目し、いじめに発展したプロセスを考える姿勢を培う。 いじめ事案に対し、今後どのような言動に注意し、未然防止につなげるかを組織で考える。 	<ul style="list-style-type: none"> SNSの普及により、直接的ないじめではなく、インターネットを介した事案が増え、発見が難しい。 ネットを介したいじめ事案で、個人情報が拡散された場合、データとして残るため、被害者側の心の傷や不安が消えにくい。 加害者側への非難は学校外からも入ってくることもあり、対応がよりいっそう難しくなっている。

2. 研修のねらい（実践前）

【ねらい（研修を通じて伝えたいこと・組織に期待すること）】※箇条書き	時間の目安
<ul style="list-style-type: none"> 一人一人がもっている何気ない情報でも他の教員と共有することで、いじめにつながる可能性を把握することができるため、普段からの情報共有が大切であることに気付く。 生徒に関する情報を一人で判断したり抱え込んだりするのではなく、多くの意見を基にチームで対応することの大切さに気付く。 	60分

3. 研修の実践

実施日	機会（職員会議・担任会など）	活用事例
10月 14日 木曜日	生徒指導部・保健美化部・相談部合同勉強会	事例6(高②)
実施時間	参加者	
14:00~15:05 (65分)	生徒指導主事, 生徒指導部員3名, 保健主事, 養護教諭2名 相談主任, 相談部員2名, 初任者1名, 常勤講師1名 計12名	

4. 工夫したこと（独自性）

<ul style="list-style-type: none"> あらかじめ用意された研修用のパワーポイント資料を2分割し、前半の導入部分を事前に参加者に見ておいてもらうことで、研修の目的を当日までに理解してもらえらるようにした。また、当日は後半のワークの実践から始めることにより、研修時間の短縮化を図った。 記録用紙を大判プリンタで印刷しておくことにより、準備の効率化を図った。 情報カードの裏面に大きく担当者の名前を印刷しておくことにより、情報カードの配付を効率的に行った。 前年度に実施した「いじめの対応力を高める校内研修」でまとめた記録用紙を、研修の最初に確認してもらうことにより、昨年度参加された先生方には2回の研修で「見立て」から「対応」までの一連の研修であることを再認識してもらい、初めて参加される先生方には今回の研修の目的が明確になるようにした。

5 実践して気が付いたこと（成功点と改善点）

- ・研修用のパワーポイント資料を2分割し、前半の導入部分を事前学習する機会を設けたことにより、研修の流れや内容についての質問はなく、時間を効率よく使うことができた。
- ・記録用紙の見出し等をデータ化したことにより、班の数が多くなっても準備にかかる手間を減らすことができ、準備時間を短縮することができた。
- ・前年度に実施した「対応力」研修を復習し、本研修の目標を明確にすることで、情報共有の方法や見立てのポイントの理解度が高まった。
- ・「いじめの早期発見」というねらいを明示したため、事例ワークの中で「いじめ」という判断に結論付けることが前提で話し合いが進んでいるような印象があった。教員が、このような「いじめ」の研修に参加することで生じる先入観や思い込み、「シンキングエラー」も考慮する必要があるように感じた。

6 参加者の声（『個人の振り返りシート』より）

- ・三観点による初期判断のフローチャートは参考になった。
- ・「被害感」について、今回の事例のように本人の申し出がない場合が、現場でも多いのではないかと感じた。
- ・自分の情報カードには「行為」「被害感」につながる情報が無かったので、各先生方からの情報を聞くことで考え方は変化した。
- ・自分だけの情報の見立てでは、グループの見立てと全く違うものとなっていた。誰か一人の情報が欠けるだけで、その後の対応が不適切になる可能性があることが分かった。
- ・立場によって知り得る情報は違い、それらを共有することで「行為」の実態が見えてくることが分かった。
- ・「被害感」が「なし」、 「行為・客観性」が「あり」の場合、いちばん深刻になる可能性があることに非常に驚いた。
- ・生徒と教員、教員同士や生徒同士でも「いじめ」に対する認識の違いがあり、「シンキングエラー」を考えるとときには、このような違いを理解しておく必要があると思った。
- ・日頃から生徒とよく話をして、教員同士でもコミュニケーションを取ることが大切だと改めて感じた。
- ・誰（教員）が、誰（生徒）に、話を聞くかによって得られる情報、その信用度や具体性が変わるので、一斉に集まって情報交換することが大切だと思った。
- ・いろいろな立場の人がチームとして関わることが大切だと思った。担任や部顧問など、生徒と過ごす時間が長い教員が気付くことや、他生徒からの情報を見逃さないことが重要であると思った。
- ・生徒指導上、「客観的事実」がないと加害者に対する指導は難しいが、被害者を守るための手だては早い段階から対応していく必要があると思った。
- ・本人の意思（どうしてほしいか）を踏まえて、慎重に行動すべきだと思う。また、いじめに発展する前に対応することが大切だと思う。

7 考察（感想、成果、今後の課題や組織への期待）

学校現場において、教員は普段から生徒の状況把握を行っているが、情報を共有することは後回しになっている部分も多く感じる。そのため、普段から情報共有をしておくことが大切であるとの感想が多く見られたことの意義は大きい。特に若手の先生方については「自分で対応することが大切」という考え方から一人で抱え込んでしまうことがあるため、彼らがこの研修をとおしてチームで対応することや役割分担をすることが大切だということに気付いたことが強く印象に残っている。今まで、教員として「いじめ」を判断する際の葛藤などから対応までに時間がかかることもあったが、この研修の中で明確な判断基準を多くの教員で共有することで、今後早期の判断と対応ができるようになり、深刻化を防ぐことができるのではないかと期待している。そのためには教員間の風通しをよくすることも大切だと感じた。この研修は「いじめの見立て・対応」の研修としてだけでなく、教員間のチーム力を向上することや、若手教員が組織に対する所属感を高めることに効果的だと思われる。今後、この研修が組織力向上のために活用されることを期待している。